

パラオへ渡った別海村民について

令和7年7月 別海町郷土資料館

はじめに

1914（大正3）年の第一次世界大戦開戦以後、日本は当時ドイツの植民地であった南洋群島を占領して軍政下に置き、1919（大正8）年のヴェルサイユ講和条約締結によってドイツが領有権を放棄して国際連盟から統治を委任されると民政を布き、第二次世界大戦の終わりまで統治していた。この時代に、南洋庁が設置されたのがパラオのコロールであった。南洋群島には、数万人の日本人が生活し、農業や漁業、養殖業などを営んでいた。終戦後、日本人の多くは帰国したが、現在に至るまでパラオの言語や文化には日本の影響が見られる。また、終戦後も、独立時の大統領である故クニオ・ナカムラ氏など多数の日系人が活躍してきた¹⁾。

本稿では、戦前に別海村からパラオに移住した人たちがいたこと、そして戦後別海村に戻った人たちがいたことについて、現時点で判明した事実について述べることにする。

1 別海町の地域史に掲載されたパラオへの移住者

別海町上春別の地域史である『上春別四十年郷土の生いたち』には、1933（昭和8）年に黄金地区の菊地と稲室という人物がパラオへ移住していることが記されている²⁾。菊地と稲室は共に1930（昭和5）年に黄金地区に入植している。黄金地区は、1930年2月に入植が始まり、この年59戸が入植した。1931（昭和6）年に16戸が加わり、75戸となる。1932（昭和7）年の大霜害により、翌年には17戸の転住者が出た。このうちの2戸が菊地と稲室であり、パラオに移住したのであった³⁾。

別海町中西別の地域史である『中西別半世紀』に掲載されている入植者名簿によると、以下の6戸がパラオに移住していたことがわかる⁴⁾。

- 1 山下久治（昭和5年高知県から入植。パラオ移住年不詳）
- 2 大川広（昭和5年静岡県から入植。パラオ移住年不詳）
- 3 森川繁治（昭和6年岐阜県から入植。パラオ移住年不詳）
- 4 中村右エ門（昭和6年大阪府から入植。パラオ移住年不詳）
- 5 早田虎雄（昭和6年佐賀県から入植。昭和8年パラオに移住。）
- 6 吉原鹿一（昭和6年佐賀県から入植。パラオ移住年不詳）

中西別地区への入植は1929（昭和4）年に始まる。この年に入植したのは57戸、1930（昭和5）年に入植したのは141戸、1931（昭和6）年に入植したのは136戸で、合計334戸である⁵⁾。このうち、名簿に転出年が明記されている入植者に限定しても、1932～1934（昭和7～9）年に転出しているのは61戸であ

1) 在パラオ日本大使館ホームページ「二国間関係」https://www.palau.emb-japan.go.jp/itpr_ja/bilateral.html（2025年5月25日閲覧）；森垂紀子「委任統治領南陽群島における開発過程と沖縄移民―開発主体・地域・資源の変化に着目して」野田公夫編『日本帝国圏の農林資源開発「資源化」と総力戦体制の東アジア』（京都大学学術出版会、2013年）、319頁。

2) 『上春別四十年郷土の生いたち』（1972年）28-29頁。黄金部落開基五十周年記念協賛会編『五十周年記念誌』（1980年）、10頁にも、黄金地区の移住者名簿があり、同様にパラオへの移住者として菊地と稲室の名前が記されている。

3) 黄金部落開基五十周年記念協賛会編『五十周年記念誌』（1980年）、10、13頁。

4) 『中西別半世紀』（1979年）、167-170頁。

5) 『中西別半世紀』、167-170頁から集計。同書20頁にも入植戸数の記述があるが、若干の差異がある。

り⁶⁾、入植者の少なくとも18%は入植からわずか数年で別海の地を離れている。

中春別地区の地域史である『中春別のあゆみ』と『中春別市街80年の大いなる足跡 悠久』によれば、中春別富野地区の相澤松雄が1937（昭和12）年に別海村からパラオに移住し、戦後1948（昭和23）年別海村に再入植している⁷⁾。

別海町の地域史の記述からパラオへの移住者が判明しているのは、上春別黄金地区、中西別地区、中春別富野地区のみである。

2 パラオ移住の背景

グリッド状に殖民地区画された北の原野に本州から移住し、日の出から日の入りまで毎日休むことなく未開地を耕して畑にしていた苦労を無にしてまで、多くの人たちが僅か数年で別海の地を離れたのは、1931（昭和6）年の冷害凶作と1932（昭和7）年6月29日の大霜害がきっかけであった。打ち続く大冷害に絶望した村民は、500人が参加した同年8月10日の西別小学校での農民大会を始め、各地で農民大会を開催し、道庁への陳情請願の代表者を決定した。また、上春別の住民は395名の連署をもって転住を嘆願した⁸⁾。

9月18・19日に代表者が道庁に直接陳情すべく札幌に出発したが、この中のひとりが後にパラオに渡る森川繁治であった⁹⁾。別海村を含む根釧地区は、1932年の大霜害を契機に穀菽農業から主畜農業への転換を図ることになるが、同時に多くの転住者を出し、その中にパラオへの移住者も含まれていたのであった。

3 パラオへの移住

南洋庁は、1924（大正13）年から25（大正14）年の間に、パラオ本島内のアイライ川、ガルドック川、ガルミスカン川流域に植民地区画を選定し、1938（昭和13）年以降はそれぞれ「瑞穂村」、「清水村」、「朝日村」という邦名が付けられた¹⁰⁾。1933（昭和8）年、この清水村に最初に入植したのが、別海村の森川繁治を団長とする26戸、138名であった¹¹⁾。

打ち続く冷害に苦しんだ別海村と標津村の有志は、1932（昭和7）年森川繁治に旅費を支給してパラオの調査を依頼した。森川はパラオを調査した結果として、北海道の比ではないとの報告を行った。この報告を受け、一団は1933（昭和8）年2月22日にパラオに向けて出発した。当時の厚床駅長大沼良治は、私費で横浜埠頭まで見送ったという¹²⁾。3月12日にコロールに到着し、同月14日にガルドック植民地に到着した¹³⁾。この中に、黄金地区からの移住者、中西別地区からの移住者が含まれていたと考えられる。

また、1937（昭和12）年、相澤松雄一家がガルドック植民地（清水村）に移住している¹⁴⁾。

6) 『中西別半世紀』、167-170 頁から集計。

7) 中春別酪農振興会編『中春別のあゆみ』（1981 年）、359-360 頁。中春別市街 80 年の大いなる足跡発刊実行委員会編『中春別市街 80 年の大いなる足跡 悠久』（2009 年）、31-33 頁。

8) 『別海町百年史』381～383 頁。

9) 『別海町百年史』386 頁。

10) 森前掲書、335-336、367 頁。

11) 及川淳太郎『ガルドック植民地誌概要』（ガルドック自治会、1938 年）、3 頁。森垂紀子氏からの資料提供。

12) 及川前掲書、3 頁。駅長名は『彩雲鉄道 標津線の 56 年』（1989 年）、87 頁。

13) 及川前掲書、3 頁。

14) 相澤武子「なつかしい思い出の年月」『中春別市街 80 年の大いなる足跡 悠久』（2009 年）、31-33 頁。番場（旧姓相澤）紘美氏からの電話による聞き取り調査（2025 年 6 月 8 日、7 月 2 日、7 月 22 日）。相澤武子は相澤松雄の三女。

4 相澤一家のパラオでの生活と日本への引揚げ

相澤松雄の六女番場（旧姓相澤）紘美氏は、1944（昭和19）年にパラオで生まれたため当時の記憶はないが、母であるマサオや姉たちから当時の生活の様子を詳しく聞いている。以下、主に同氏からの聞き取り調査に基づき、パラオでの生活と日本への引き揚げについて記述する¹⁵⁾。

相澤松雄は、パラオに行く前は父相澤勝之助の入植地である別海村富野地区でマサオと結婚し、実家のそばで分家して農業を営んでいた。1937（昭和12）年に妻マサオと娘3人でパラオに移住し、パラオでは農業ではなく製材を仕事にしていた。妻マサオはパイナップル缶詰工場で働いていた。マサオによれば、パラオでの生活は裕福な暮らしであり、世の中に極楽という国があるとすればここだと思ったという。しかし1941（昭和16）年12月の太平洋戦争開戦以降、その状況は一変する。

1943（昭和18）年9月30日、大本営はパラオを含む内南洋などを絶対的国防圏に定めたが、1944（昭和19）年3月30、31日、米機動部隊がパラオ諸島を空襲した。米機動部隊が絶対国防圏の奥深くパラオ方面を急襲したことは、日本軍中央部にとって大きな衝撃であった。米軍は同年7月25日から28日まで連日パラオ本島を含むパラオ諸島を空爆し、コロール町が全焼するなど、甚大な被害を被った。同年9月15日、米軍はパラオ諸島のペリリュー島に上陸、17日にはアンガウル島に侵攻し、1～2か月で日本軍は玉砕した。その後米軍はパラオ本島（バベルダオブ島）には上陸しなかったが、断続的に小型機による銃爆撃が行われた¹⁶⁾。

このような厳しい戦況が続く中、松雄は1944年6月に紘美氏が生まれて1週間で軍に現地召集された。輸送船も来なくなり、食糧も軍に供出しなければならず、食べるものもなくなってしまった¹⁷⁾。

「戦争が始まったら、日本からの輸送船は来ないし、お米も来ないし。根菜類、サツマイモとかそういうのは取れるんですけど。戦争になって輸送船が来なくなったら、途端に食べる物がなくて。そんな時でも兵隊さんの食糧は確保しなければならないから。」

父は私が生まれて1週間で現地召集がかかり、38歳だったんですけどね、いよいよ最後の決戦で。私が生まれて母はまだ寝ているので、父が寝ないで煮炊きするのに使う薪を作るんですって。母が、「父さんなんで寝ないで薪作るの?」と聞いたら、父は「いやあ、月夜だからな、明るいから眠れないからよう」って。母が「赤紙来たの?」って聞いたら、「来ねえそんなもん!」って言いながら、一生懸命薪を作って。でも母はその姿見て、赤紙が来たことを悟ったようです。それで覚悟はしたみたいなんですけど、朝になったら「俺、ちょっと行ってくるからな」って。そんなふうで行ったみたいなんですけどね。

そのころになったら自分たちで作ったお芋も自分たちでは食べられなくて、みんな兵隊さんのだから。母たちは軍用に出てお芋を作って、乳飲み子の私がいたって、栄養失調でおっぱいも出ないの。食べるものないからね。赤子の私は泣いても声も出ないんだって。そしたらね、口だけが開いてるからね、ああ泣いてると思って母はね、「ああ可哀そうにな、逝ってもいいよ、母さんも後からすぐ

相澤武子「なつかしい思い出の年月」で四女としてあるのは誤り。

15) 2025年6月8日・7月2日・7月22日番場紘美氏から電話での聞き取り調査による。

16) 防衛庁防衛研修所戦史室 編『中部太平洋陸軍作戦(2) ペリリュー・アンガウル・硫黄島』朝雲新聞社〈戦史叢書13〉、1968年、1-236頁参照。

17) 一方、現地日本軍の食糧事情も1944年末から悪化し、栄養失調で病院に護送される者が日を追って増加し、多くの兵士が脚気や栄養失調で餓死する状況であった。佐々木由一郎「僚友は玉砕 パラオ本島の戦い」。戦争末期のパラオ本島（バベルダオブ島）で軍人や住民が飢餓状態にあったことについては、澤地久枝『ベラウの生と死』（講談社、1990年）も参照。

逝くからね」って。そんなふうにして過ごしてたって。

母は家から1里も離れたところに作業に出るでしょ。そしたら私と一回り違う12歳の姉（敏子）がね、片道1里の道を毎日午前中1回、午後から1回、私をおんぶして母におっぱいをもらいに行くんです。長女シゲ子はパラオに渡る前にジフテリアで死んでたからね、二女の敏子が一番上だからね、お母さん代わりで。片道1里をおぶっていくから疲れて大変でしょ。その間は四女の貞子が私をおんぶして、ずっと子守なんですって。私、おなかすくから泣いてばかりいるでしょ。だから四六時中おぶって。おぶりながらも、蛇でもトカゲでも見たら棒で叩いて、それを捕まえて焚火であぶって、皮剥いて私にしゃぶらせたんだって。泣かれるのつらいからね、なんでもしゃぶらせておけば、泣かないでしょ。姉がね、「あんたなんて、あたしのおかげで生きてるんだよ」って。ある日、姉の貞子が私をビロウジュ（ビンロウ）の葉に包んで木陰に置いて別の場所で友達と遊んでいたら、米軍の空襲があって、操縦士がチューインガム食べながらニタニタ笑って撃ってくるの見えるくらいの距離だったって。姉は側溝に隠れて無事だったんだけど、びっくりして腰が抜けたので、這って私のところに行ったら、私がスヤスヤ眠っていたのでホッとしてまた腰が抜けたって。

お芋だって、自分の畑で作ったって全部軍用になるから、自分の畑の芋ひとつ取ったって怒られる。すぐ上の姉（勝代。当時6歳）も栄養失調でヨタヨタしながらね、芋の葉っぱを摘んで、塩も味噌も無いから、海水で煮て食べて、飢えを凌いだみたいです。戦争はダメですね。ほんとにダメですね。悲惨ですね。戦争前は海に行けば貝でも何でもすぐ取れたものを。その時は1回食べる分しか取らなかったんだって。そんな豊かな暮らしだったのにね。」

終戦を迎え、相澤松雄一家は帰国することになったが、三女の武子が重病であったため、予定していた船には乗れなかった。ところが、乗船予定であった船は海中にあった不発弾に触れて大破した。武子の病気のおかげで家族の命は助かったのであった。

「仲良しのお隣さんもみんな引き揚げ船に乗っていくのに、栈橋でまた会おうねって言ったのに、それが目の前で水柱が上がって。地獄だったって母は言っていました。海底に埋まっている魚雷が爆発したの。コロール湾に不発弾があって、それを踏んで水柱上げて、地獄だったって。もしこれに乗っていたら助かっていません。」

武子が病気だから乗せられないって言われて、父はほかの子が4人いるから何とかして帰らなければならんって言って、武子は現地の人にもらってもらおうっていうことになったんだけど、母は頑として、武子を置いていくんなら私は行かないと。もし武子の病気が治ったら武子一人ぼっちになる。私は行かれないと母が言うと、父は、紘美は赤ん坊でなんにもわからないから紘美と一緒に置いて行けって。引揚船に乗らないと帰れなくなるからね。だけど母は、どうしても子供を置いて帰れないというので、父は沈没した船に乗らないことにしたんです。」

武子が死んだ場合は水葬にするという条件で引揚船（LST＝アメリカ軍の戦車揚陸艦）に乗ることが許可され、相澤松雄一家は1946（昭和21）年2月8日浦賀に無事入港した¹⁸⁾。

18) 財団法人南洋群島協会編『南洋諸島引揚者名簿』（1957年）、423-424頁。南洋庁の職員であった上山時雄は、パラオから戦車揚陸艦に乗って同じく2月8日に浦賀に入港している。出航前に荷物や現金をアメリカ兵に没収されたことや船内の様子などを記している。上山時雄『椰子の葉陰で：私の歩んだ道』（1982年）、51-53頁。ただし、『南洋諸島引揚者名簿』に上山の名前はない。

「母はどうしても武子を連れて帰りたいかったため、それであればということで、途中で確実に死ぬからその時はその時点で水葬にしますからと言われました。持ち込める荷物には制限があり、パラオに持ってきた長女の遺骨すら持ち帰ることができませんでした。そのような荷物制限の中で、母はたった一枚の敷布団を持ったそうです。死んだらそれに包んで武子を水葬にしようと思ったそうです。布団を持ち込むので着替えなんかも何も一切持てないです。それで引き揚げて日本に帰って来て、武子はすぐ千葉の病院に入院しました。」

その武子も後に回想録で、パラオでの生活と帰国後について次のように記している¹⁹⁾。

「島のまわりは軍艦がむれをなし艦砲射撃。空からはB29の爆撃と云う毎日の中で、住宅や学校も焼け、美しかった自然もまたたくまに破壊され、目の前で仲良しのクラスメートのほとんどが亡くなった悲しい思い出は、余りにもむごたらしくて思い出したくありません。長期間にわたりジャングル内の防空壕にかくれ、食糧は本土からの輸送に頼っていたので、お米はもちろんお味噌やお塩がなく、海水を汲んで野草を煮て飢えをしのぎ命をつなぎました。従って栄養失調でも多くの友人を失った訳です。」

5 パラオから別海村への再入植

帰国後、相澤松雄一家は別海村中春別富野の本家に一時身を寄せた後、1948（昭和23）年に同じ富野地区の別の場所に再入植した²⁰⁾。また最初から、開拓のやり直しであった。

「日本に帰っても、新しい土地をもらって開拓するでしょう。だけどなんせ13や14や15の女の子ばかりだから、なんにもないし、馬1頭だけが頼りだからね。開拓するのに大木立木を伐採して、切り株抜いて畑を作るのに相当苦労したみたいです。私たちも日本に帰って来てからは小っちゃくても手伝わされましたよ。夫は農作物作るのが好きなんですけど、私は大嫌いです。子供の時お手伝いするのが辛かったの。」²¹⁾（番場紘美氏の回想）

その後、1963（昭和38）年頃に相澤松雄は離農して中春別市街の建設会社に就職し、娘たちはみな独立していった。玉井裕志の小説「その眼は……生きていた」（『朝霧』創刊号、1966年）は、パラオから別海に帰国した若者2人が登場する小説である。フィクションではあるが、一部戦後の相澤松雄一家をモデルにしている²²⁾。

なお、相澤松雄一家以外にパラオから別海村に戻ってきた者は現時点では確認できない。番場紘美氏も、パラオからの引揚者で別海町にいた人は記憶にないという。『南洋諸島引揚者名簿』で「本籍・行先地」の欄に別海村と記されているのは相澤松雄一家だけである。また、中西別地区からパラオに移住した6名の名前も『南洋諸島引揚者名簿』では確認できない²³⁾。

19) 相澤武子「なつかしい思い出の年月」、31 頁。

20) 『中春別のあゆみ』（1981 年）、159-160 頁。

21) 2025 年 6 月 8 日・7 月 2 日・7 月 22 日番場紘美氏から電話での聞き取り調査。

22) この小説については、番匠健一「入植と離散と文学サークル運動—境界地域としての北海道東部と玉井裕志と山田洋次の出会い」『立命館生存学研究』vol.4（2020 年）、63-64 頁を参照。

23) ただし、本籍・行先地と名字から、本人やその家族の可能性のある名前はいくつか見つけることができる。『南洋諸島引揚者名簿』330、340、367-368、400、428、461 頁。